カフカ

kanata.S

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
カフカ

【Ｎコード】
Ｎ８６２３Ｅ

【作者名】
ｋａｎａｔａ．Ｓ

【あらすじ】
「・・・・・・え？結婚？」「はい。」肩にかかるくらいに切りそろえられた髪が、頷く彼女と一緒に揺れる。彼女の幸せそうな笑顔に痛みを感じなかったと言えば嘘になるけど、その痛みと同じくらいの喜びもあった・・・・。

ほどよく混んだカフェのＢＧＭはジャズ。
久しぶりに見た目の前の彼女の相変わらずのかわいさを直視できなくて、なんとなくほとんど知らないジャズなんかを耳で追っていたから、その一言に気付くのが一瞬遅れた。
「・・・・・・え？結婚？」
「はい。」
肩にかかるくらいに切りそろえられた髪が、頷く彼女と一緒に揺れる。
普段はあまり表情を出さない彼女にしては珍しく、小さく微笑んでいる。
「そうなんだ、おめでとう。お相手は？」
震えもせず、どもりもせずに答えを返せたのは奇跡に近い。
衝撃に頭が真っ白になった。
彼女の幸せそうな笑顔に痛みを感じなかったと言えば嘘になるが、その痛みと同じくらいの喜びもあった。
だんなさんは？へぇ、研究員なんだ、すごいね。チェコ人？！どこで知り合ったの？
そんな自らの質問と相槌を遠くで聞きながら、俺が思い出していたのは８年前の夏のことだった。

高校の入学式。
入学式前に、掲示板に張り出されたクラス割に基づいてとりあえず集合したクラスで、俺は同じ中学から来た奴と話していた。女子のうちの何人かは「あの人、北中の涌井要だよね？」「超ラッキーなんだけど」などという全然ひそめていない歓声をあげている。聞こえないふりをしながらも、俺は満足だった。

今だから言えるが、恥ずかしながら高校に入るまで、俺は自分で「イケてる」男だと思っていた。
野球部では投手として全国大会にも出場し（初戦負けだったが。）運動神経はかなりいい方。勉強だって、野球をやりながらたまにテスト前にちょっとまじめに取り組むだけで学年で１０位以内に入っていたし、県下でも一番の進学校に入ったのだって野球入学ではなく実力だった。
顔はアイドルのツカサに似ているとよく言われて、３ヶ月に一回くらいは女子から告白されていた。それこそ全国大会に出場した中３のときなんか、バレンタインデーには５０個もチョコをもらったくらいだ。
中３の夏に１７０を越した身長は順調に伸びて今は１７５。止まる気配はないからあと１年もすれば１８０は超えているはずだ。
という、まぁ多少裏打ちされた事実もあって、高校に入学したときの俺は多分学年でも一番モテる男だろうという自信があったのだ。今考えると思春期とはいえよくそんな勘違いができたものだと、穴があるなら入りたいくらいの記憶だが。
そんな俺だったが、中学までは女子にかなり興味はあっても本当に野球一筋。当然部活は男女交際禁止だし、今時丸刈りを強制されていた。頭の形はきれいだから坊主も似合っていたし（と当時は思っていたのだ。本当にタイムマシンがあるなら当時の自分をしばき倒したい。）、野球自体は楽しかったが、全国大会にも行けたしもういっか、という思いが強くなって、高校ではモテたい、彼女だって作りたい！と意気込んでいたのだ。
そんな俺の夢の高校生活を粉々にしてくれたのが、「桜井清吾」だった。

友達と昨日見たお笑い番組の話で盛り上がっていた俺は、突然教室が静かになったことに気付いて、不審げに周りを見渡した。
周りは男も女も皆びっくりしたような顔で教室のドアのほうを見

ている。
つられてそちらに顔を向けた俺は、思わず「あ」と呟いた。
そこにいたのは、まさに「王子様」だった。
俺だったら片手でつかめそうな小さな顔に、少しくせっ毛気味の茶色い髪。まつげはこんなに離れた距離からもわかるくらいバサバサで、つり上がり気味のアーモンド形の目と、スッと通った鼻筋と、薄い唇。全てのパーツが完璧な形であるべきところに収まっているとしか言いようが無い顔。身長だってつい2週間前まで中学生だったとは思えないほどデカい。思春期特有の、身長に体重が追いついていないという感じの細い体格で、唯一高1である、という証明になりそうな感じだ。
周りが声も無く見つめているというのに、いつものことなのだろう、特に視線を気にした様子も無く黒板に張り出された座席表を確認し、自らの位置を確かめるとこちらに近づいてきた。
なんと俺の隣の席だった。
あんぐりと見つめる俺らに、奴「桜井清吾」は「隣？よろしく。」とにこやかに微笑んだ。
そのあまりのステキな笑顔と少しかすれた低すぎない感じの甘い声に、不覚にも男である俺ですらときめかされたのだった。

天は二物も三物も四物でも与えるらしい。要するに不公平ということだ。
清吾は尋常じゃないほどの顔のよさに加えて、運動神経も抜群で、中学のときは特に部活はやっていなかったらしいくせに体育の授業の野球で、全国大会出場の俺の玉を1試合でサイクルヒットを達成してくれた。
当然勉強は英、数、理、地理は学年トップ、ほかの教科も常に学年で5番以内、唯一苦手だという古典ですら学年で10位以内。さらに性格は全然気負ったところもなく、誰にでも優しくて気さく、熱狂的過ぎるファンの子にはさりげなく距離をとり、冗談も面白く

て男子にも慕われる。
はっきりいってここまで来るとできすぎて、2週間もたつころには「キザ男」という反抗心（僻みに近い）はあっても、対抗心などまったくなくなるというのが人情である。
同じクラスで隣の席ということで、俺と清吾は結構仲良くなったが、清吾は誰とでも仲良くやっていた反面、一線を画しているというか特定の誰かとすごく仲良くなるということはなかった。
俺はといえば、隣に歩く王子様がいるというのに、モテたいとギラギラするのも馬鹿らしくなり、中学自体と比べればお遊びとしか言えないような野球部に入ることにした。強豪校じゃないから体育会系特有の先輩後輩関係もなく、生活態度には全く干渉されなかったので結構純粋に野球を楽しめ、俺ってやっぱり野球好きなんだなーと柄にもなく感慨にふけってみたりした。
熱心ではない野球部はだいたい6時から7時くらいには終わる。
帰りにグランドから自転車置き場へと歩く俺たちと、さっそく生徒会にスカウトされた清吾とは結構帰る時間がかぶったが、多少雑談するくらいで寄り道したり買い食いしたりすることはなかったから、塾にでも行ってるんだろうな、と思っていた。
そんなある日、あれは街にクリスマスソングが流れていた頃だから11月頃だろう。従兄弟に子どもが生まれたから顔を見に来い、と言われて部活は休んで従兄弟のアパートを訪ねた。従兄弟の子、というと俺となんという関係になるのかは知らないけど、生まれたばかりのその子のかわいらしい仕草ベスト10やら、これが生まれた時の写真、で、これが生まれてから2時間後の写真で、なんて話をとうとうと聞かされ、結局帰途についたのは終電1時間前くらいになってしまった。
駅まで送るという従兄弟の言葉に、すぐだからと断り駅を目指した。
俺の家のある街よりだいぶ栄えているこの辺りに夜来ることはあまりない。繁華街を物珍しげにゆっくり歩いていると、通りの脇の

細い道でキスしているカップルを見かけた。
おお、生チューだ、と視界の端に入れながら通り過ぎようとしたが、ふとなんとなくひっかかって行儀が悪いと思いながら立ち止まった。スニーカーの紐を直すふりをしてもう一度ちらりと見ると。
・・・・・・・やっぱり。
キスしている男のほうは、清吾だった。
普段はおろしたままの髪をちょっと立たせて遊ばせていて、それだけでもだいぶ雰囲気が違う。さらに服装も普段の王子様、という清吾からはかけ離れた格好で、なんというか普段はキラキラしいオーラみたいのがあるが、今見るヤツは色気があるというか女がほっておかないだろうな、という感じたっぷりなのだ。はっきり言って顔はどう見ても清吾だと確信しているのに半信半疑というか・・・まさか双子オチ？でもそれならとっくに女子が騒いでるよな。
ま、なんにしても意外性のあるヤツなんだな。
興味がわいたが、いくらなんでも話しかけるわけにもいかずその場はそのまま帰った。
その後、一応女子に双子説について軽く探りを入れたところ、かなり美人の妹が一人いるだけだという。じゃ、あれはやっぱり本人だったんだなと確信を深めた。
とはいえ本人に確かめる機会もなく半分忘れかけていた頃、たまたま軽くつき指をしてちょっと早めに部活を引けた俺と清吾が一緒になる機会があった。
挨拶をして、駐輪場へ向かう俺と駅へ向かう清吾は方向が一緒だからいつも通り連れ立って歩く。
いつも通りの雑談をかわしながら、ふと先日のキスシーンのことを思い出した。こんなチャンスはもうないだろうな。
「お前の彼女、すごいきれいな人なんだな。」
先日の彼女は出るとこは出てる割に、ミニスカートからはかなり細い足が見えてて、しかもあの足首！
顔も清吾とキスしてても耐えうるくらいには美人だった。（表現

がなんとなくおかしいが）
「彼女？」
びっくりしたように聞き返す清吾。
「ほら、いつだっけ？１ヶ月くらい前に駅の商店街で１１時頃キスしてただろ？」
俺の問いに、驚きを浮かべていた清吾はじわじわとおもしろそうな笑みを浮かべた。
あれ？別人？いや、こんなキレイな顔のヤツがゴロゴロいるわけないし。
「・・・よくわかったね、オレだって。」
「いや、確かに雰囲気かなり違ったけど、わかるだろ普通。」
「そうかな？今まで知り合いに何人か会ってるんだけど、気付かれたことなかったんだけど。」
にやり、と笑った。
そうするとさっきまで王子様、としか言えなかった顔が途端に男、という雰囲気になる。
ドキっとする俺に、あいつは急に立ち止まった。
「じゃあね、おれ電車だから。」
駐輪場へと曲がる角のところだったのだ。
「あ、ああ。じゃあな。」
唐突な挨拶に戸惑いながらも、まぁ別にそこまで突っ込むことでもないか、と清吾に背を向けた。
「彼女じゃないよ。」
その背に突然かけられた声。
振り向くと、清吾が微笑んでいた。
「仲のいい友達。彼女、結婚してるしね。」
それだけ言うと、アイツはくるりと背を向けて歩き出した。
あんな美人とセフレかよ、すげーな。俺なんかこの前やっと童貞捨てたばっかりだっていうのに。っていうかアイツ学校じゃ猫かぶってんのか？なんて考えながら、なんとなく男として輝かしく見え

る背を呆然と見送った。

それがきっかけで俺たちはよくつるむようになった。

最初は楽しかった野球部のだらけ加減に嫌気が差していたのもあって、清吾に誘われて夜一緒に遊ぶことも増えた。

当然のごとくアイツは女にモテていた。それはもう、例えは悪いが夏の夜の街灯に虫が集まるように、アイツが歩けば美女が寄ってくるのだ。その中からアイツが選ぶのはいつも後腐れなさそうな美人だ。

しかも

「お前って髪の長いお姉さま好きなんだな。」

ヤツにはあらゆるタイプの美女が寄ってくるが、アイツが相手にするのは基本的に「キレイ」って感じの女性ばかりで、「かわいい」って感じの子の場合は年上じゃなければダメで、その上「童顔」って感じの女性は年上でも年下でもダメみたいだった。そこから導き出した俺の結論に、清吾はびっくりした顔をする。

お、こいつ自分で自分の好み気付いてなかったんじゃねえの？と、なんとなく嬉しくなった俺への清吾の答えといえば。

「残念。髪の長い人も、お姉さまも好みじゃないよ。」

まったく、天邪鬼ヤロウめ。

仲良くなると、アイツは確かに基本優しいが、天邪鬼な上に皮肉屋で、人の嫌がることが好きという録でもない奴だった。一度「お前なんで学校で王子やってんの？」と聞いた俺に、「面白いから」と答えた男である。

特に俺をからかうことはかなりのお気に入りで、本気でムカつく俺を見ては心底嬉しそうに笑うのだ。これがまた恐ろしく奇麗な顔なのだからタチが悪いとしか言いようがない。

とはいえそんな俺もアイツのおこぼれをもらって（といってもアイツに自ら近づいていくだけあって、かなりの美女そろい）そこそこ経験を積んでいたから人のことは言えないが。

だからといって毎日遊んでいたわけじゃなかった。
テスト前となればまじめに試験勉強などもしていた。というか清吾に見てもらっていた、というのが正しいか。さすがに高校ともなると、しかも県下一の進学校となると今まで見たいにちょっとやればできる、というわけにはいかなかった。
俺のうちは母子家庭で、バリキャリアな母さんはいつも帰りは午前様だったから、勢い試験勉強や、今日は夜遊びはいいや、という気分の日は大体俺のうちで過ごした。
「かー、ほんとこの話、意味わかんねー。目が覚めたら虫になってた、とかありえねーだろ。」
理数系の俺は現国が大の苦手で、その日も勉強する意味がまったくわからん現国の話にお手上げ、と教科書を投げた。
「現国は主人公の気持ちに主眼が置かれるから、そこを読み解くのが重要だよ。」
そんな俺に目もやらず、試験前だというのに王子様はと言えば好きな作家の新刊を読んでやがる。
「そんなの無理だろ、俺目が覚めて虫になってたことなんてねーもん。わかるわけないだろ。」
「目が覚めて虫になっている、っていうのは極端だけどね。ある日突然思いもよらない自分に気付くっていうのは俺はわかるな。」
読んでいた文庫から顔を上げた清吾は、そんなことを呟いた。
その真剣な口調に投げ出していた俺は身を起こし、清吾を見つめた。
そんな俺に気付かないのか、どこかを見つめたまま続ける。
「ふと気付いたら、今まで想像したこともないような気持ちが自分の中に存在してる。そしたら、今まで自分だと思って信じていたものが信用できなくなる。まるで自分が何かとてつもないモノに変身したようで。」
清吾は俺の視線に気付いたのか、急にいつものやわらかい、アイツの本性を知った今となってはうさんくさいとしか言いようがない

笑みをうかべる。
「まぁこんな感じで、この話はシュチュエーションは突飛だけど、主人公の感情を考えてみたらそこまで変わった話じゃないだろ。」
「ああ、そうかもな。」
正直なんと声をかけていいかわからなかった俺は、清吾が笑ってくれたことに多少ほっとしながら頷いた。
「この主人公の名前、作者に似ていると思わないか？母音と子音の組み合わせが一緒だろ？これは主人公がイコール作者ってことを暗示しているんじゃないかといわれてるんだ。」
「へぇ。」
ってことはこの話書いたヤツも自分の中にある日見たことも考えたことも無い何かがあることに驚いたんだろうか。
「テストには絶対出ないけど、こういう雑学を知っておくと苦手な教科も多少はとっつきにくくなるだろ。」
「言ってることはわかるけど、それは頭いいやつの理屈だろ。俺なんか覚えるだけで精一杯でそんな雑学を勉強してる暇ねーし、第一そっちを覚えたら試験内容なんか覚えられねーよ。」
唇をとがらす俺に、「確かにそうだな。」と頷く清吾。
事実なだけにムクれる俺を見て、清吾は嬉しそうに笑った。

清吾の妹に初めて会ったのは、清吾のおかげもあって夜遊びの割りにはいい成績で2年に上がれたばっかりの頃だった。
それまで俺は清吾の家に行ったことはなく、清吾からも誘われることはなかった。なにかの拍子に清吾の両親の話は聞いたことがあった。清吾の家は共働きで、両親とも帰りはうちの母親といい勝負くらいの時間らしいと聞いていた。その時の口ぶりでは特に親に反発しているという感じでもなかったし、第一これだけ頭がよくて如才ない清吾が反抗期みたいのがあるとかは想像できない。
なのに、家に帰りたがらないというか、夜はだいたい毎日俺と夜遊びしてるか俺んちにいるかで、たまに俺が部活やらの用事で遊べ

ないときは、一回家に帰った後、わざわざ一人で遊びに出て行くらしい。まぁ何か事情があるんだろうなと思っていたある日、いらなくなったテキストをくれるという約束になってたのに珍しく清吾が忘れた。従兄弟の子どもを見に行くことになっていた俺は、清吾の家が従兄弟の家に行く途中だったから、俺が清吾のうちにテキストをもらいに寄ることにした。

清吾の家は駅から程近い高級住宅街にあるかなり立派な家だ。っていうか、これじゃうちのボロさが恥ずかしい。

広いリビングに案内され、いかにも高級そうな紅茶を出した清吾は「ちょっと待ってて」と自らの部屋に取りに行った。

待っている間、落ち着かない気持ちでキョロキョロと周りを眺めてしまう。

うわー、すげーな、このテレビ。何インチだよ。うちだったら、まず置く場所ねぇな。

しかも吹き抜けって。天井にはでかいプロペラみたいのが回っているし、暖炉まであるし！こりゃ清吾のオヤジ、絶対バスローブ着て、ワイングラス回してるよな。

そんな妄想をしているとリビングのドアがあいた。

てっきり清吾だと思って顔を向けた俺は、あまりの衝撃に言葉をなくした。

中学生くらいだろうか。小さな顔の半分くらいを占めるんじゃないかという大きな瞳は真っ黒で、ただでさえ大きな瞳をびっくりしたように見開いて俺を見つめていた。透明感のある白い肌、つんとがった鼻とまさに桜色といった唇、茶色がかった髪は肩くらいの長さで、顔を取り囲むようにカットされたその髪型は小さな頭をさらに小さく見せている。長袖の淡い黄色のワンピースに包まれた華奢な体、膝丈のワンピースから見える折れそうに細い足。

・・・・・・・・はっきり言って一目ぼれだった。

お互いに言葉も無く見つめあっていたのはほんの1，2秒のことだったと思う。だが俺にとっては10分にも20分にも感じる瞬間

だった。
「いたのか、紗生。」
硬い声が彼女の後ろからかかる。
サキっていうのか。可愛い名前だな。漢字ではどう書くのか、後で清吾に聞いてみよう。
金縛りから解かれたように、俺はぎこちなくサキちゃんの肩越しに清吾を見た。
「・・・いちゃ悪いの？」
かかった声に少し体をこわばらせていたが、サキちゃんはどことなくけんか腰に清吾に答えた。
が、はっきり言って会話の内容なんてどうでもいい。声のまたかわいいこと！
「・・別に。塾は？」
「今日は体調が悪くて休んだの。」
言い捨てるように、清吾に背を向けて俺に近づいてた・・・・わけではなく、リビングの奥のキッチンへ向かっただけだった。やばい、ほんの少し距離が縮まっただけだっつーのに、動悸がおかしい。息ってどうやって吸ったっけ？あれ吸うんだっけ？吐くんだっけ？
「体調悪いって・・・風邪か？熱は？何か食べたのか？」
「別に。ただちょっと頭が痛いだけ。」
そっけなく言い放つと冷蔵庫から出したジュースをコップにうつし、こくりと飲む。
コップ両手持ちだし！上を向いたときの首が！超細っ！
「病院行くか？」
清吾の言葉の何が気に入らなかったのか、コップを乱暴においてにらみつけた。
「普段はいないくせに、こんな時だけアニキ面しないで。」
そういうと、すっとリビングを出て行ってしまった。
閉まったリビングのドアを、困ったように清吾は見つめていた。

俺が一目ぼれした美少女は「桜井紗生ちゃん」。俺たちより二つ下の中3だ。
さすが清吾の妹だけあって、清吾とはあまり似てないがかなりの美少女だ。
俺は清吾に嫌がられながら紗生ちゃんの情報を収集した。
紗生ちゃんの誕生日、血液型、好きな食べ物、嫌いな食べ物。
で、一通りリサーチを終えた俺はなんとお近づきになりたいと「デートに誘ってくれ。」と清吾を拝み倒した。
珍しく清吾は露骨に嫌そうな顔をして「紗生がＯＫするかわからないし。」と繰り返したが、「とりあえず声をかけてみるだけ。」とさらに繰り返す俺。
最終的には「とりあえず声をかけるだけ。」と不承不承頷いた清吾に、「で、あのー」と更なるお願いを口にした。
「なんでおれまで一緒に行くんだよ？」
「頼む！だって俺緊張して、絶対うまくしゃべれねーよ。」
「じゃあそもそもデートなんか誘うな。」
「仲良くなるきっかけが欲しいんだよ！」
押し問答の末、かなり強引に清吾を説得し、なんとか一ヵ月後のデートにこぎつけることができた。まぁデートというかアニキ同伴だけど。
初めてのデートはオーソドックスにただ映画を見に行くだけだったが、前々日あたりから緊張しまくって、着て行く服を何にしたらいいのかと、着ては脱ぎ、着ては脱ぎ。で、やっぱり手持ちの服じゃダメだ、と買いに走り。さらに清吾に「紗生ちゃんの好きなファッションは？」とか「やっぱりＴシャツよりＹシャツのほうが清潔感あるか？」と聞き倒しては嫌がられ、最終的にはアイツ着居しやがった。
そんなこんなでデート当日。
当然のことながらその日は散々だった。
待ち合わせ場所には1時間以上も前に着いてうろうろしまくって

警察に職質され、解放された頃に現れた紗生ちゃんを見た途端、緊張してまったくしゃべれなくなり、しかも睡眠不足がたたって映画は爆睡。

家に帰ってから、自らの失態に憤りすら感じたのだ。

で、リベンジを誓ってまたもや清吾にゴリ押し。

清吾は「懲りないな。」と諦めたように呟いて、紗生ちゃんを誘ってくれた。

当然清吾も一緒に来てくれるようにお願いしたのは言うまでもない。

で、２回目のデートでうまく行ったかといえば、やはり散々だった。

前回よりは進歩して、なんとか紗生ちゃんに話しかけたがドモりまくり、そんな自分に焦ってどんどん意味不明なことをしゃべりだす俺。表情の硬くなる紗生ちゃん。苦笑して、見かねたように間に入ってくれる救世主清吾。

どうやって帰ったのかも覚えておらず、自らの部屋で不甲斐なさにもだえ苦しむ俺はまたもやリベンジを誓って清吾へ。

とそんなこんなを繰り返すうちに、２，３ヶ月に１回は三人で出かけるというのがいつしか習慣のようになっていった。

４回目くらいで、やっと紗生ちゃんと１０ｍ以内の空間にいることに慣れてきた俺は（今考えれば、よく紗生ちゃんは気持ち悪がらなかったと思う。というか本当は気持ち悪がっていたかも。やばい、ヘコむ。）、やっと清吾と紗生ちゃんが話している時や、とにかく俺以外に注意が向いている時に落ち着いて紗生ちゃんを見れるようになった。

そこで気付いたのは、まず紗生ちゃんがあまり表情がないということ。あんまり笑ったりしないから、顔がきれいなだけにちょっと近寄りがたい感じがするのだが、その分何かの拍子に笑ってくれた時の笑顔はものすっごく！世界一かわいいし、笑ってもらえたことがすごく嬉しく感じる。

あと、清吾と紗生ちゃんはあまり仲が良くない。
紗生ちゃんはあんまり愛想がないほうだが、初めて紗生ちゃんと会ったときの会話からもわかるとおり、特に清吾には結構とげとげしく反抗的で、清吾はそんな紗生ちゃんの扱いに困って接触を避けているという感じだった。だから清吾は毎日夜出かけてたのかも、と想像する。俺にはちょと年が上で、もう結婚している兄貴しかいないからよくわからないけど、考えてみれば俺も中学生で兄貴がまだ家にいた頃は結構反抗的だったし、思春期なんてそんなものか。それになんだかんだ言っても、こうやって誘えば清吾と一緒に出かけるくらいだし、おにいちゃんのこと案外好きなんだろうなと思っていた。

そうこうして、紗生ちゃんと知り合って一年が経つころ、紗生ちゃんの清吾への反抗期は変化することはないままだったが、俺たちが3年に上がるとき紗生ちゃんがうちの学校に入ってきた。
俺は大喜びだったが、清吾はなんだか微妙な顔をした。
まぁ確かに仲がいいとは言いがたい妹が同じ高校に入ってくるのは微妙なのかもしれんな。でも紗生ちゃん、やっぱりなんだかんだで清吾のこと好きなんだな、とほほえましく思った。
紗生ちゃんが高1で、俺たちは灰色の受験生となったがたまのデート（すでにデートとは呼べない状態だったが）は続いていた。
だが、正直俺はその頃半ば諦めていた。
紗生ちゃんと出かけるようになって1年。
出かけた回数も2桁近かったが、紗生ちゃんと俺の距離は知り合い程度からまったく近づく気配は無かった。露骨に嫌がったりはしないし普通に話しかけてくれるが、積極的に俺に近づいてくることは無くて、その気が無いというのはこういうことなんだろうな、という典型的な態度だった。
というかそもそも俺自身が未だに緊張しまくり、最初より良くなったとはいえ清吾がトイレなどで二人きりになると、緊張してわけ

のわからないことをべらべらしゃべりまくったり、逆に何もしゃべれなくなったりと全く進歩がないのだという問題点もあった。
それでも三人で出かけるのはもはや習慣となってしまっていて、2，3ヶ月もすればなんとなく行く場所が決まっているのだった。
今考えるとかなり不思議な組み合わせだ。俺は紗生ちゃんが好きだけど常に空周りだし、紗生ちゃんの清吾へのとげとげしさも消えたわけではない。そんな紗生ちゃんに一歩引いたように接する清吾。俺たちのベクトルは全くかみ合わないまま、それでも絶妙のバランスを保っていた。

そして、3年の夏の初め。そろそろ本格的に受験勉強をしなきゃならないな、と夏期講習の申し込みを済ませた頃、三人で鎌倉へ行った。
初夏とはいえかなり暑くて、駅から海岸まで歩いただけでぐったりした俺たちは砂浜の横のカフェで休んでいた。デッキで日陰の下、生暖かい風に吹かれながら飲み物を飲んでいると、紗生ちゃんは「ちょっと海を見てくる。」と、白いワンピースのすそをはためかせて、一人波打ち際で遊んでいた。強い海風が、出会った頃よりはちょっと伸びで肩くらいの髪の毛を乱して、片手で髪を押さえつつ、もう片手は濡れないようにスカートのすそを握っている、。
ああ、やっぱりかわいい。本当に世界一かわいい。
目を細めて紗生ちゃんを見つめながら、何の気なしに清吾に問いかけた。
「そういや清吾、夏期講習結局どこにした？俺が昨日申し込んだところ、あと3人しか枠がないって言ってたぞ。」
返事を待ったが返ってこない。
不審に思って清吾を見た俺は。
一瞬後に慌てて顔をそらした。
見てはいけないものを見てしまった。

そんな言葉がこみあげてくる。
心臓が飛び出しそうなほど脈打つ。心臓の音が大きすぎて、すぐ耳元で鳴っているかのように聞こえる。
耳鳴りすらした。

清吾は波打ち際の紗生ちゃんを見つめていた。
その目が。
なんていうのか、人はこんなに優しい目で人を見ることができるのか、というような。
いとしくていとしくてたまらないものを見ていると、目が、顔が、全身が告げていた。
おそらく今の清吾に俺のことなど頭にない。おそらく世界すらないだろう。
ただひたすら、全神経を注いで紗生ちゃんを見つめていた。

「ふと気付いたら、今まで想像したこともないような気持ちが自分の中に存在してる。そしたら、今まで自分だと思って信じていたものが信用できなくなる。まるで自分が何かとてつもないモノに変身したようで。」
「俺はその気持ちわかる気がする。」
「残念。髪の長い人も、お姉さまも好みじゃないよ。」

いつかの清吾の言葉がフラッシュバックのように、頭に浮かんで、ぐるぐると回った。
「要？」
突然かけられた声にびくっとした。
こちらを不審げに見つめる清吾の顔は全くいつもと同じだ。
お前、もしかして・・・・・・・。

咽につかえた言葉は出ることはなかった。
そうだ、妄想もいいところだ。さっき見たのは気のせいだったんだ。
収まらない動悸のまま、ぎこちなく返事を返す。
「悪い、紗生ちゃんがかわいくて聞いてなかった。」
「・・・・まったくお前は。」
一瞬はっとしたような顔をして、すぐに苦笑する清吾の顔がなんとなくこわばって見えるのも気のせいだ。　当たり前だ、だってまさか実の妹を・・・・・
と、
「暑―い！！焼けちゃう。」
珍しくはしゃいだ声で紗生ちゃんが飛び込んできた。
正直助かった、と思った。
今の全てのことを深く考えたりしたくなかった。
「水冷たかった？」
いつもはぎこちない俺も、ここぞとばかりに積極的に話しかける。
「水は気持ちいいんだけど、太陽が痛いくらい。あーあ、水着持ってくればよかった。」
「今年水着買った？」
そんな普通の会話がありがたかった。

それから1学期の終了までは何回か清吾と出かけたが、申し込んだ夏期講習が違ったのと、お頭の出来の違いから志望校にC判定の俺はだいぶ頑張らなければならず、講習や塾に追われてなんとなく疎遠になった。
それは夏休みが明けても変わらずに、ほぼ毎日塾に行くハメになった俺は清吾と遊ぶ機会はほとんどなくなった。とはいえ学校では話もするし、一緒に行動もしている。しかし、ふとした時に訪れる沈黙を恐れていたことは確かだった。

俺が感じるその気まずさにあの出来事が影響しなかったとはいえない。
ふと浮かんでくるあの事について考えたくなどなかったから、勉強で気を紛らわし、あまり二人きりにならないようにしていたとは思う。
だが、清吾とは本命の大学は一緒だったし、少し距離をおいて俺が落ち着けばまたすぐに元に戻れるとも思っていた。
明日から自由登校になるという日、校門のところで駅へと向かう清吾と、チャリで帰る俺は「じゃあ試験会場で。」と言って分かれた。
受ける学部が違ったから、同じ場所とはいえ試験の部屋は違う。
「試験終わったら連絡するから、メシ食って帰ろうぜ。」
俺の誘いに清吾は頷いた。

そしてそれが清吾を見た最後の姿だった。

清吾は結局本命の大学を受験しなかった。
誰にも内緒で、親にすら言わずに九州の大学を受験して受かっていて、本命の大学の受験日には九州でアパートを探し、あとは入学手続きをするだけにして帰ってきたのだった。
そして親に決定事項として、九州の大学に通うことと入学届けの親のサインの欄への記入を依頼した。
自主性を重んじるアイツの親はだいぶびっくりしたようだが、自立したい、という清吾の言葉に寂しがりながらも賛成した。
紗生には俺から言っておくよ。
アイツはそう言って、結局紗生ちゃんが学校に行っているうちに何も言わないまま行ってしまったのだ。
そしてもちろん俺も何も知らされなかった一人だった。
家に帰ってきたら清吾の荷物がなくなっていることに驚いて、そこで初めて知った紗生ちゃんからかかってきた電話で。

「本当は知ってたんでしょ？！」「ひどい！なんで教えてくれなかったの？」
初めて聞く紗生ちゃんの取り乱した声に驚くことすらなく、俺はただ呆然としていた。
アイツは行ってしまった、誰にも言わず、俺にも言わずたった一人で・・・・・・・。
それからどれくらい経っただろうか。
紗生ちゃんの泣き声というか悲鳴に近い声に、ただひたすら相槌とごめんという謝罪を呟くだけの俺に、紗生ちゃんはだんだんと落ち着きを取り戻していった。
そして。
「おにいちゃんは逃げたのよ。」
「え？」
「卑怯だわ。」
そう呟いて、電話は切れた。

逃げた。
俺の勝手な想像が、もしも、万が一真実だとしたら、確かにアイツは逃げたのかもしれない。
だが、逃げる以外に何が出来ただろうか。
人の気持ちは割り切れるものではない。
これはダメだから、無理だからやめよう、なんて簡単にできるもんじゃないことくらいは俺もわかる。
万が一俺の想像が当たっているのだとしたら、正しいかどうかはわからないけど、距離を置こうとするのは当然だ。
だがしかし、そんなアイツを「逃げた」「卑怯だ」と責める紗生ちゃん。
もしかしてアイツの気持ちも知っているのだろうか？
そして「逃げた」「卑怯だ」という言葉の意味はもしかして紗生ちゃんも清吾を・・・・・・。

全ては憶測でしかない。
そして俺には聞く勇気も、そして資格もない。
俺はそのことを考えるのをやめた。

無事合格できた大学でも、その後入った会社でも俺はそれなりに楽しく過ごしていた。
清吾ほど気の合う奴も、バカらしいくらいにかっこいい奴もいなかったし、なんとなく付き合うことになった彼女も紗生ちゃんほどかわいくもなかったけどそれは仕方のないことだった。
清吾にも紗生ちゃんにももう二度と会わないのだろうか、と思っていた社会人1年目の春、伸びに延びて就業時間が終わっても終わる気配を見せない会議中に俺の携帯が鳴った。
どうせ悪友からのマージャンの誘いだろうと何の気なしに見た携帯の呼び出し画面には「清吾」という懐かしい名前が浮かんでいた。
慌てて周りに「トイレ」と呟いて携帯を持って席を立つ。
そうこうしているうちに携帯の呼び出しは一回切れて、焦るあまり机の脚にひっかかって盛大にすっころんで皆の注目を浴びたがそんなことを気にしている場合じゃなかった。
会議室を出た瞬間、もう一度携帯が震えた。
「清吾？！」
嬉しくて嬉しくて。
自分でもびっくりするくらいの大きな声と弾んだ口調に思わず笑い声がもれた。
しかしそれは清吾じゃなかった。
電話をかけてきたのは清吾のお母さんで。
内容は清吾が死んだ、という知らせだったのだ。

その後のことはよく覚えていない。

気付いたら清吾の家の前で立っていて、どうしたらいいのかわからずに、ただただ清吾の家を見上げる俺に「要さん」と声がかかった。

のろのろと振り向くと、紗生ちゃんが黒い服を着て立っていた。

ああ、相変わらず心臓が痛くなるくらいかわいい。だいぶ大人びたけれど、可愛い上にキレイさが加わっている。

だけど俺の胸はときめかなかった。それどころではなかった。

「上がってください。」

痩せたというよりはやつれた、という雰囲気の紗生ちゃんに促され、初めて紗生ちゃんに会ったリビングに案内された。

お茶を出してくれた紗生ちゃんは俺の向かいに座り、そこでぽつりぽつりと事情を話してくれた。

清吾は大学3年の時アメリカに留学したこと、そこで名門大学の2年に編入していたこと、院に進むつもりだった清吾は長期休暇を利用して、アフリカにフィールドワークに出かけ、そしてそこでテロに巻き込まれたこと。

そういえば昨日の夜中、会議の資料を作りながら見るとはなしにつけていたテレビのニュースでその事件が流れたいたな、とふと思い出した。

３０人以上が犠牲になり、そして確かにアナウンサーは、日本人が巻き込まれた可能性があるといっていた。

だけどまさかそれが清吾だなんて誰が想像するだろうか。

ご両親は遺体を引き取りに行ったが、出発前の電話で、既に清吾の遺体は爆発で粉々になってしまっていて判別は困難であるといわれたそうだ。

現実感がまるでない。俺と紗生ちゃんのあいだに、分厚い柔らかな壁があるような気がする。

何も考えられないまま、何をしゃべっていいのかもわからなくて、なんとなくうつむいていた俺は、ふと紗生ちゃんの左手の薬指に銀色の指輪が見えた。

「それは？」
おいおい、関係ないだろ、という自分の声は聞こえたが、もう何も考えたくなくて、ただ思いついたことを話すことにする。
「これは・・・」
一瞬のためらいの後に、しかし紗生ちゃんは続けた。
「これはおにいちゃんにもらったんです。」
思わず顔を上げた俺に、紗生ちゃんは悲しげに微笑んだ。
「軽蔑します？」
思いもよらない言葉に俺は愕然とした。
俺は二人を軽蔑したのだろうか。だから距離を置いたのか。
答えは否だった。
「するわけないよ。」
俺は紗生ちゃんを見て言った。おそらく紗生ちゃんの目を見てきちんと話すなんて初めてだと思う。
「軽蔑なんかしたことない。俺の態度が二人を傷つけたのなら本当にごめん。でも誓って言うけど軽蔑したわけじゃないんだ。本当に考えたことも想像した事だって一回もないようなことだからびっくりしたのは確かだけど、どちらかといえば納得した、の方が近いかもしれない。もちろん二人の気持ちが理解できるわけなんかないけど、なんとなく感じていた違和感はこれだったんだなって。」
伝わるだろうか。
「びっくりしたし、理解できないし、理解したいとも、しようとも思わない。というか正直そこのところは深く掘り下げたりしたくない。でも俺は二人が大好きだから、そしておそらく二人とも悩んで苦しんでいるということもわかるから、どんな答えを出したとしてもそれを受け入れたいと思っていたよ。」
「・・・ありがとう。」
ちょっとは伝わったのだと思う。
一瞬紗生ちゃんは本当に嬉しそうな微笑を浮かべた。
しかし俺は頭を振った。

「お礼を言われることじゃない。今言ったことは本当の俺の気持ちだけど、紗生ちゃんに聞かれてはっきり自覚したんだ。あの夏の鎌倉行った日を覚えてる？あの時アイツ、紗生ちゃんのこと本当に優しい目で、大好きなものを見るように見つめてて、俺それで初めてもしかしてって思ったんだ。だけどびっくりしすぎて、アイツに不自然な態度取っちゃって、それからなんとなくぎこちなくなって・・。時間を置いて俺が冷静になればまた元に戻れる、なんて気軽に考えてたら黙って九州行っちまうし。清吾きっと寂しかったよな。紗生ちゃんみたいに、俺がアイツのこと軽蔑してるなんて思っていたのかもしれない。俺、なのに一言もアイツに俺の気持ち伝えることもせずに、暢気に暮らしてて・・・。馬鹿だよ、俺。最低だ。」

胸が焼けるように熱い。口の中に何かとても苦いものがあるようだ。後悔の味、自己嫌悪の味。

「・・・・こんなことになるなんて、死んじまうなんて。清吾に誤解させたまま死なせちまうなんて。どうしたら・・・どうして俺・・・・・・・。」

泣きたくなどないのに、まるで許しを請うみたいでしたくないのに、蛇口が壊れたみたいに俺の目からはみっともないくらい涙が流れてくる。顔に当てた両手は水をすくったみたいにびちゃびちゃだ。

「畜生・・・！」

「おにいちゃん要さんの気持ち、きっとわかってますよ。」

頭を抱えた俺に、紗生ちゃんはそっと呟いた。

「この指輪をくれたの、アフリカ行く前に一時帰国した時でした。私も大学生になって、あの頃のお兄ちゃんの苦しさとかためらいとかちょっとはわかったと思います。でもこれをくれた時、おにいちゃん「それつけて要に会いに行くか」って笑ってました。」

ゆっくりと俺は顔を上げた。

「「要、また挙動不審になりそうだよな。」ってあのいつもの、優しそうだけど信用できない顔で笑ってましたから。」

笑う清吾が目に浮かんだ。いつもの、やわらかい、それでいてア

イツの本性を知っている俺にはうさんくさいとしか言いようがない笑みをうかべるアイツ。
「内緒ですけどおにいちゃん、要さんのこと親友だって言ってたんですよ。」
びっくりして涙が止まった。
呆然と紗生ちゃんを見る俺に、目が赤いままの涙で頬をぬらした紗生ちゃんが、笑った。
「似合わないでしょ？だけど一回だけ、確かに要さんのこと親友だって言ったんです。あの皮肉屋で天邪鬼で二重人格なお兄ちゃんがですよ？私もびっくりして言葉が出てきませんでした。その時、要には絶対言うなよって言われたんですけど、時効ですよね。」
その顔は清吾の優しげな、それでいて意地悪な微笑みにそっくりだった。

清吾が死んでから3年。
紗生ちゃんのことが心配だったけど、たまに思い出したように来るメールではなんとか元気にやっているようだった。
「後を追うんじゃないか」とひそかに恐れていた俺としては正直拍子抜けした気持ちもあったが、紗生ちゃんが生きようとしてくれたことは嬉しかった。
まぁいざとなったら仕事を辞めてでも彼女の側に、なんて考えたことが全くないとは言い切れない俺としては、俺なんかまったく必要ない、というのはなんとも寂しいが。
俺はといえば、配属された企画の仕事に忙しくて、働き出してから付き合いだした彼女となかなか会う時間が取れず、最近は喧嘩ばかりだ。
そんな時、かかってきた紗生ちゃんからの「ちょっとお会いできませんか」なんて電話に、全く望みはないとわかってはいてもなんとか仕事を調整してのこのこ出かけてしまった。

で、呼び出されたカフェで結婚の報告を受けるはめになるのだった。
しかも、相手の仕事の都合で、あと1ヶ月ほどで海外へ移住することになるらしい。だから式は海外で身内だけで済ませるつもりなんです。招待できなくてすいません。なんて謝られてしまった。
いや、紗生ちゃん、結婚式呼ばれるなんて、リアルすぎてせつないから行きたくないし。
なんてことは無論言えるはずもない。
・・・・・まぁそんなもんだよな。
紗生ちゃんに気付かれないように小さくため息をついた後、俺は紗生ちゃんを見つめた。
結婚相手のことを語る紗生ちゃんは本当に幸せそうだった。
まだ清吾がいなくなってたった3年じゃないか、という呟きは大きくなる前に潰しておいた。
・・・・俺が望みないっていうのは、わかりきってたことだし。これでいいんだよな、清吾。
心の中で呼びかけた清吾は、いつものあの人の悪そうな笑顔を浮かべている。
その時紗生ちゃんの携帯が鳴った。
俺に断って電話に出る紗生ちゃんはおそらく婚約者であろう相手と弾んだ声で話している。
「場所わかる？うん、じゃあ。」
電話を切って、相手が仕事の打ち合わせを終えてここに迎えにくるのだという。
「じゃあ俺はそろそろこれで。本当におめでとう。お幸せに。ここは俺が払うよ。」
相手に会うなんて冗談じゃない、と慌てて席を立とうとすると
「いえ、彼が要さんに挨拶したいっていうんです。私のおにいちゃんみたいな人だって言ってあるんで、ぜひお会いしたいって。お忙しいですか？あと5分もかからないでつくと思うんですけど、待

ってもらえますか？」
と腕をつかまれ。
・・・・・負けました、だってその瞳で見つめられて断れるわけないだろ。
「でも俺チェコ語どころか英語だってしゃべれないし。」
「大丈夫です、私が通訳しますから！」
と力強く断言されてしまい、苦笑して「じゃあ」と席に腰を落とす。
と、「紗生」と俺の背後から呼びかける声。
どこかで聞いた懐かしいその声。
・・・・・・・清吾？！
慌てて振り向くと、そこに立っていたのは清吾とは似ても似つかない男性だった。背は清吾と同じくらいだから１８０ちょっとだろう、チャコールグレーの細身のスーツに、青のストライプのシャツはネクタイをせずに第２ボタンまで空けているが、いやらしい感じがしないのは一目で高級だとわかるスーツとシャツのせいだろう。
彼は俺に軽く会釈し、「はじめまして」と右手を差し出す。
握手ってことか？
あまり求められたことがないだけに戸惑いながら俺は彼の手を握り返した。
「クロサワハツハです。涌井要さんですよね？紗生から話は伺っています。」
そう笑う顔は整っているというよりは男前という感じだ。
ていうかそもそも。
「チェコ人？」
思わず紗生ちゃんにすがった俺に、紗生ちゃんは小さく舌を出した。
「ごめんなさい、彼実はチェコ生まれの日本人なんです。小さい頃からチェコと日本を往復していて。あ、今は国籍はチェコですよ？」

ごめんといいながら、紗生ちゃんちょっと嬉しそうですけど。
そいうや、さっきの電話も日本語だったもんな。
「紹介してくれる人全員にそのネタやってるんですよ。」
そう言って微笑むその声はやはり清吾に似ている。
それだけに全く違う顔から聞こえる清吾の声という状況に、違和感とかすかな不快感が湧いてきた。
そんな俺の心のうちなど気付くはずもなく、ハツハとかいう男は、さわやかな弁舌で自分の仕事のことや紗生ちゃんとの出会いなどをしゃべっている。
だが、彼がしゃべればしゃべるほど違和感と不快感は大きくなる一方で、だんだん俺は耐えられなくなってきた。
「もしお時間があれば、この後一緒に食事でもいかがですか？」
その問いに、慌てて首を振る。
「いえ、この後所用がありますので。」
「そうですか、残念です。」
帰ろうと席を立ったその時、ふと彼の空いた首元から引き攣れたような痕が見えた。一瞬止まった目線ですぐに察したのか、彼はあぁ、と呟く。
「目立ちますかね。小さい頃大やけどをしてその痕が今も消えないんですよ。」
「そうなんですか、すいません、じろじろ見てしまって。」
「いえ、男ですから別に気にしてないんでお気になさらず。」
「すごいやけどの痕なんですよ、おなかとか、腿とかにもあるんです。いったいどんな状況で、って思いますよね。」
そう相槌を打つ紗生ちゃんに、裸を見るようなことやってるんだな、と俺はさらに凹んだ。
本当に俺何やってんだか。
むなしくなって、立ち上がり二人に別れの挨拶を切り出した。
二人は送る、と席を立ち店先まで出てきてくれた。
「じゃあ僕はこの辺でお先に失礼します。」

会釈をして、二人に背を向けたが。
そうだ。これだけは言っておかないと。
「クロサワさん、くれぐれも紗生ちゃんのことお願いします。絶対に幸せに、本当に幸せにしてやってください。俺と清吾の分も絶対に。よろしくお願いします。」
「・・・わかりました。」
クロサワとやらは俺の真剣な様子に気圧されたようだったが、俺のお願いに視線を逸らすことなく力強く頷いたのを確認して、「じゃあ」と今度こそ背を向け歩き出した。
「涌井さん。」
既に１０ｍ近く離れているというのに、少し大きな声で呼びかけてくる。なんだよもう。
「はい。」
イラっとしながら振り向いた俺に、
「ぜひまたうちに遊びに来てください。チェコはいいところですよ、景色もいいですしビールもおいしいです。芸術の街ですしね。カフカの生家もうちのすぐ近くなんですよ。」
「機会があったらぜひ。」
おいおい、声がでけーよ、周りから注目されてるだろ。
ちらちらとこちらを見ながら通りすがる人の視線を感じながら返事をした。声は小さめで聞こえないかもしれないが、頷いておいたので意味はわかるだろう。
満足そうに手を振る二人にもう一度会釈し、今度こそ俺は家路へと向かった。
ったく、あんなにでかい声で恥ずかしいだろ。だいたいビールはともかく芸術なんか俺にわかるわけねーだろ、カフカとかって誰だよ、まったく。
半ば八つ当たりだとは自覚しながらも毒づいた。
だがふと。
カフカってどっかで聞いたような。

そうだ、確か現国の教科書に載ってて、確かある朝目が覚めたら虫になっているという意味のわかんない話を書いた奴だ、確か。

「この主人公の名前、作者に似ていると思わないか？母音と子音の組み合わせが一緒だろ？これは主人公がイコール作者ってことを暗示しているんじゃないかといわれてるんだ。」

さっき俺に話しかけていた声と同じ声がいつか言った、そんな言葉が突然思い浮かんだ。

カフカの書いた「変身」の主人公は確かザムザ、だったと思う。
そしてさっきのクロサワの名前は「ハツハ」。
同じ母音と子音の組み合わせだ。

それにあの痕。
さっきは考えなかったが、やけどの痕の割には面というよりは点々とえぐれたような傷ではなかったか。そう、まるで、何かが爆発したときに飛び散った破片がささったかのような。

まさか・・・・・。
慌てて振り向いたが店はもう遥か遠くで、さっきと同じ場所に二人が立っているようだ、ということしかわからなかった。

ただの偶然だろうか。顔だってまったく清吾とは似ても似つかないじゃないか。だが、顔ならば整形という手段はある。だが声はどうだろう。整形で顔を変えるということは聞いても、声をかえるというのは聞いたことがない。

まさか清吾・・・・・・・。

浮かんだ考えのままに、もと来た道を帰ろうとして、やめた。
なんて確かめるというのだ、「まさか清吾なのか？」とでも？
アフリカに行く前に紗生ちゃんに指輪を渡したという清吾。
おそらくその時まで悩んで苦しんで、そして覚悟を決めたのだと思う。
そして紗生ちゃんもそれを受け入れた。
アフリカでテロに会ったのはおそらく偶然だ。
だが、惨事から奇跡的に助かった清吾は、これが二度とは訪れないチャンスだと気付いた。
そして、親を捨て、友人を捨て、自分すら、名前すらも捨てて、たった一つ、いとしい人を抱きしめることを選んだのだろう。

だが、それも全ては憶測でしかない。
そして俺には聞く勇気も、そして資格もない。
俺はそのことを考えるのをやめた。
そう、そして憶測が真実だったとしても、俺は理解できないし、理解したいともしようとも思わない。
だが、今度こそ受け入れることはできる。

想像をしてみる。
今頃二人は、俺の反応を思い出しながら、してやったりと、あの優しげでそれでいてうさんくさい微笑みを浮かべて笑いあっている。
・・・非常に腹が立つが、なぜか安心する光景だ。
だがやられっぱなしでは気がすまないから、俺は突然チェコを訪ねてやることにする。
ドアチャイムの音に出てきた紗生ちゃんは驚いて、慌てて奥へ呼びに行き、驚きを隠して外人らしくそしらぬ顔でハグなんかする清吾。

悪くない。
それは悪くないどころか、アイツがハグするなんてあり得ないだろ！こみ上げてくる笑いのまま、その場で思わず一人で笑った。
遠くに見える二人の人影に背を向けて歩き出した俺は、目に付いた旅行代理店でチェコのパンフレットをもらい、一週間休むための仕事の算段をしながら帰途についた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8623e/

カフカ

2011年1月12日20時42分発行